

サバルワルさん

— ニューデリー便り —

藤 高 征 子

はじめに

この井伏鱒二特集号の編集を進めている途中に、在印の会員藤高征子さんから便りがあって、サバルワルという人に会ったこと、その人から日本の作家の手紙をいくつかみせてもらったこと、また、井伏さんについておもしろい逸話を聞いたことなどを知らせてきた。サバルワルといえば、井伏さんの「鶏肋集」その他の随筆でわれわれにはたいへん親しい名前なので、早速返事を送って、サバルワルさんの消息をさらにはっきりさせ、聞き書をとること、また、できれば物故作家の手紙を一資料として筆写させてもらうことなどを依頼した。その結果送られてきたのがこの原稿である。

一方、井伏さんは、この三月の『新潮』に「嘗ての亡命客」という随筆を発表された。サバルワルさんから三十何年ぶりに手紙が届いたことが綴られている。思うに、サバルワルさんが井伏さんに手紙を出す気になったのは、藤高征子さんに会った、その刺激によるものであろう。藤高さんは、サバルワルさんあての井伏さんの返書も見せてもらったと知らせてきている。

奇遇によって、ここにこういう原稿を載せることができたことを喜ぶとともに、サバルワルさんの健康をお祈りする。そして、氏の渡日の願いがかなえられることを念ずる。

ちなみに、藤高征子さんは、朝日新聞印度特派記者藤高明氏夫人である。おなじ新聞記者仲間として、親しい交際が始まったものようである。(磯貝英夫)

我が家に時々、インド人の老新聞記者が訪ねてきます。サバルワルさんと言ひ、七十七歳で、杖こそ突いていらつしゃいますが、背筋をシャンと伸ばし、背高く肉付きの良い達者な老人です。彼は昔、二十年あまり日本に滞在したことがあり、日本語を話すことができます。

私がインドに来て半年ばかり経った去年の十一月、サバルワルさんから、彼が日本にいた頃、谷崎潤一郎、佐藤春夫らと親交を持っていたという話を聞きました。

「谷崎さんの手紙も持っていますよ。」とのことなので、是非見せて頂きたいとお願ひして、その後見せて頂くことができませんでした。

その手紙類は、汚れた昔風の縮緬の風呂敷に丁寧に包まれておりました。総べてサバルワルさん宛のもので、英文・ローマ字・片仮名のどれかで書かれた手紙十一通の他、佐藤春夫のいづれも平仮名だけの短い便り四通、谷崎氏の家族の方の手紙、柳宗悦氏の流暢な英文のもの二通などが含まれており、時代は、昭和三十一年の谷崎氏の戦後のものが一通ある他は、皆昭和初期(二年—十五年)のものであります。

この手紙の一つ一つをそのままここに御紹介できればよいのですけれども、サバルワルさんは「今はある都合で発表したくない。発表する時は自分でしたい。」と考えていらつしゃり、発表の場を日本の友人を頼って最近、打診していらつしゃる様子でもあるので、それは出来ず、ここでは数ある興味つきない手紙の中から差支えないと思われる二例だけを、一部抜き書きすることにしたいと思います。

昭和二年から十五年にわたる谷崎氏の手紙のうちの一つは、佐藤春夫と連名の、谷崎氏の奥さんが「潤一郎と離別致し春夫と結婚致す事と相成……」と知人

に知らせる和紙に印刷した挨拶状ですが（昭和五年八月）、その約一年半前の昭和四年三月十一日にサバルワルさんに宛てた片仮名の手紙は、ごぶさたを詫び、ごぶさたの理由として次のように書いてあるのです。

△スコシワケガアツテ、ユツクリテガミモカケナイクラヒ、オチツカナイキブンデキルノデス。ソノワケトイフノハ、イマハ、サトウノホカニダレモシラナイ、マタ、ダレニモハナスコトガデキナイ。イマニアナタニモワカルカモシレナイシ、ワカラナイデスムカモシレナイ。ボクハ、アナタノゴシンセツニタイシテ、コレイジヨウイフコトガデキナイノガザンネデス。シカシコレダケデモヒトニイフノハハジメテデス。後略▽（東京市麻布六本木町一サバルワル様宛）この事件について、谷崎氏が他にどんな文を残していらっしやるか私は知らないのですが、これだけの短い文の後ろに、谷崎氏の多くの苦悶が隠されているようで、この手紙を受け取ったサバルワルさんも当時はこれほど深刻な事件とは夢にも思わなかったのではないかしらと思ったり、あるいは、何か分からないけれども大変重大なものを感じとったのだろうかと思いを馳せています。

サバルワルさんは、これらの手紙から推すと、谷崎氏と一緒にダンスホールへ行ったり、その女の子について噂をしたり、あるいは、東京、奈良、京都などに居を交えたサバルワルさんを谷崎氏が旅先で訪れたり、サバルワルさんが珍しい品を贈ったり、お茶に招待したりという具合です。古き良き時代（唯一つの戦後の谷崎氏の手紙に、当時のことが「The Old good days」と書かれています）の文士たちの交遊を偲ぶことができます。

佐藤春夫とサバルワルさんのつき合いは、佐藤氏が谷崎氏からよく話に聞くサバルワルさんのことを何か文にした（浅学で私は読んでいたことがないのです）時、その内容にサバルワルさんが不快に思ったことがあるらしく、そのことを谷崎氏から聞いた佐藤氏がお詫びの手紙を出した時から始まったようです。その手紙の middle に、

△あの話は新しい時代の奈良の春にふさはしい詩的な美しさを感じたがままに書いた▽とあります。この「新しい時代」というのはどんなことを意味しているのか、その「奈良の春にふさはしい詩的な美しさ」を描いた佐藤春夫の作品を、日本へ帰ったら早く捜して読みたいものだなど、私の興味はあれこれつきま

せん。

また、同じ手紙の後半に、△実は、谷崎君にも叱られ、志賀氏にも叱られさうで、私も大に参つてゐるのです。▽と名前の見える志賀直哉の書簡はサバルワルさんは持っていませんが、△加納和弘君を御紹介致します、用むき直接おきゝの上よろしくお願ひ致します▽という志賀氏の名刺に書かれたサバルワルさん宛の紹介状があるところから、親しいつき合いがあったことが伺えます。

去年、志賀直哉死去のニュースを聞いたサバルワルさんは、「志賀直哉死にましたね。」と、すぐ我が家にとんでいらしたものでした。

日本に滞在中、サバルワルさんはアレーム・チャンド（インド植民地下の民衆の悲惨な生活をヒンズー語で描いた民衆作家）の翻訳を心がけ、日本語の会話には不足なくとも日本文字を書けないので、口述筆記をさせるため早稲田の英文科の学生にアルバイトを頼んだそうですが、やってきたのは、若き井伏鱒二氏であったということ。サバルワルさんは、小説家だといふこの青年の貧しさに驚いたそうですが、あるとき、新調の下駄がなくなったのでふしぎに思ったところ、それは、井伏氏が無断で質に入れたのであったそうです。あまりにも井伏文学流の話ですが、とにかく、サバルワルさんは笑ってそう話されました。

サバルワルさんの日本語は、アクセントも発音も外人臭さがなく、話すテンポもメリハリが利いていて、昔親交のあった作家達が、こんなきれいな話し方をしていたものであろうかと想像されるようなものです。今まで数回お目にかかった時、忘れてしまった日本語の部分は、英語を混ぜて話して下さったのですが、それを寄せ集めてみますと、サバルワルさんの生涯というものは、大体次のようなものと思われれます。

旧英領インド（現パキスタン領）ペシャワール地方の裕福なブラフミン（インドの階級制度カーストの最高の階層）の家に生まれた彼は、青年時代にカルカッタに出て来て、反英反植民地運動に飛び込みます。運動の過程で官憲に追われる身となり、大正二・三年に日本へ亡命しました。亡命先に何故日本を選んだかについてはまだお聞きしていませんが、ある時は次のような話をしていましたので、その話と無縁でないかもしれません。

子供の頃、日露戦争で日本がロシアに勝ったというニュースを知った時、アジ

ア人がはじめてヨーロッパに屈服しなかったというので非常に嬉しかったという話です。

日本での生活費は親元から送られてきていたようですが、足りない分を英語やヒンディ語の語学教師をして補っていたそうです。

亡命者というので特高がいつも随っていたようですが、しまいはカバンを持って帰るようになったのだそうです。

大正末に、ノーベル文学賞を受賞したラビンドラナート・タゴールが、アジアではじめてのノーベル賞受賞者ということで、改造社の招待によって講演のため来日しました。サバルワルさんはこの一行に加わり、改造社とタゴールの交渉などを受け持ったようです。タゴールの側にいたことで、志賀直哉、村上知行、谷崎潤一郎などと相識するようになりました。この間の詳しい事情について今までのところ何も聞き出せていないのは残念なことですが、さき程ご紹介した作家達の手紙は、この時から彼が日本を去るまでの間のものというわけです。

日本で二十一年を過ごした後、彼は満洲に渡りますが、この間の事情についてはサバルワルさんは何か触れられたくない様子で、私には次のように推定されるばかりです。

第二次大戦でインドは連合国側であり、本来ならインド人は日本にとっての敵国民というわけですが、サバルワルさんの場合は反英運動の弾圧を逃れて日本にきているという事情があり、そのため連合国側よりもむしろ日本が勝つことを望んでいます。これは時の軍部にとって都合の良いことで、連合国側の人間でありながら日本に戦争協力をしているというような宣伝にもなり、あるいは軍部の意向で何らかの役目を持つこととなり、満洲に渡ったのではないかと思われるのです。

日本敗戦の時は、中国軍の手に渡され、独立後のインドに二十六・七年ぶりに送り返されたということのようです。

日本にいた当時、サバルワルさんは、同志社女専を卒業した女性と一四年間交際したものの、結婚は許されず、親には隠したまま親の目の届かない満洲でわずか五年の結婚生活を経験したそうで、彼は今でも、インドへ送還される特別れたままの奥さんの写真を大切に胸に持ち歩いています。奥さんは日本に存命のようですが、そのまま会う機会もなく今日に至っているわけです。

独立後のインドに帰ってみると、日本に渡る前一緒に開った人たちは立派なポストを得ていたのですが、彼は、独立運動に加わったといっても、結果的には長く亡命してただけのことで、インドで働きがあったというものではありませんので、何のポストも得られませんでした。

彼の友人に、インドの国際問題の専門家で、「インディアン・イクスプレス」という新聞の主筆をしているフランク・モレーズという人がいます。六十八、九歳のこの人はインド最高のインテリなどと言われ、日本でいえば、亡くなった笠信太郎氏といったところでしょうか。このフランク・モレーズ氏が四年前、国会の上院議員の大統領指名議員としてサバルワルさんを推薦したそうですが、この頃、フランク・モレーズ氏は丁度反ガンジー首相の立場を「インディアン・イクスプレス」誌上に表明し始めました。それまでは友好的であったモレーズ、ガンジー両氏の間がこれで冷たくなってしまい、サバルワルさんは、そのためもう一人の競争候補に席を取られてしまったということもあるそうです。

という次第で、戦後ずっと彼はフリーの新聞記者として、香港の英字紙などに定期的な寄稿をしながら、一人暮らしを続けています。時々、ニューデリー駐在の日本人記者を訪ね、好きな酒を飲みながら、昔話に淋しさを紛らわしているという生活です。

これ程高齢の現役の新聞記者も珍らしく、年輩者を大切にするインドのお国柄もあって、サバルワルさんはニューデリーのプレスクラブでも名物男とか。昨年の七十七歳の誕生日には、インドを始め世界各国の新聞記者が各々酒を一本抱えて彼の自宅にお祝いにいったそうです。

イギリスの植民地支配、独立運動、第二次世界大戦などの現代史に濃く色どられた人生を三十年近く海外で過ごしたサバルワルさんの生涯はインド人にとっても興味深いことのように、昨年十月に、全インド放送夜八時からのテレビ・ショーに、彼は依頼されて出演しました。長い日本での生活、満洲でのことなどを、奥さんの写真や、日本や満洲で住んでいた家などの写真を写しながら、インタビューに答える形式で話していらっしゃいました。

また「ジャヴァルラルネルー・インスティテュート」という政府の現代史研究所から、独立運動の資料のため彼の話を聞きたいと再三にわたって依頼の手紙が来っていますが、彼は、「私は lady です。私が死ぬんじゃないかと彼ら焦って

ますね。」と笑ってまだ腰を上げないようです。

実は、「試論」に作家の手紙を発表できないかわりにサバルワルさんは、「私が谷崎さんたちのことを何か書きましょう」と親切に言ってお下さっていたので。ところが、私が作家達の話の初めて聞いた十一月頃からインド・パキスタン関係が険悪になり、十二月には全面戦争となってそれどころではなく、戦争が終り、そろそろ書いていただけの時期になったかと思つた矢先、彼は、夜ベッドから物を取ろうとした拍子に床に転げ落ちて腰の骨を折り、三週間の入院を要することになりました。入院三日目の昨日病院を見舞いましたら、まだ痛みが引かない状態で、とても昔の話を伺つたり、原稿をお願いできる様子ではありませんでした。

「死ぬ前にもう一度日本へ行つてみたい。今年は行きますよ。」とお正月におっしゃっていましたが、老齢で骨折とは、回復のしようによつてはそれは覚束ないのではないかしらと私は心配しているところで

(二月二十九日)